

二〇二四年度 A

小論文 (60分)

〈注意〉

- 一、開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、小論文用紙は、2枚配布されます。どちらか1枚を提出しなさい。
- 三、提出する小論文用紙の所定欄に、受験番号と氏名を記入しなさい。
- 四、提出する小論文用紙の冒頭にある所定欄に、○印を付けなさい。

受験番号		

【問】傍線部「よく目を凝らすように意識を向けるからこそ、解像度が上がり、それまでは意識されなかった細部がクローズアップされて、またさらに細かく深く理解する可能性がひらけていくことになります」とありますが、どういうことですか。本文の内容を踏まえて説明してください。また、筆者の主張に対するあなたの考えを述べてください。なお、字数は六〇〇字とします。

【時間六〇分】

読書に限らず、現代に生きるわたしたちはえてして「新しいもの」をはじめとする刺激の強いものを求めがちです。しかしそれは環境に促されてそうしてしまっているだけかもしれません。自分は何を大事にしているのか、それを大事にしたい自分は何なのか、こういった問いをおろそかにしたまま強い刺激だけを追い求めていけば、行き着く先はバーンアウトに他ならないでしょう。

「己を知れば百戦あやうからず」という『孫子』の有名な一節があります。『孫子』は兵法書、つまり軍隊の運用のための指南書です。自分を取り巻く環境を知り、その環境のなかで自分は自分をどう運用しているのか、それが「己を知る」ということです。日々刻々と変化し続けるさまざまな要素が構成する「環境」というネットワークのなかに、また日々刻々と変化している要素の組み合わせとしての「自分」を見い出す。環境というネットワークと、自分というネットワーク、この二層のネットワークを動的に捉えるにはどうしたらいいのでしょうか。

自分を取り巻く環境を捉えるということとは、自分の生活を構成しているさまざまな要素が互いにどのような関係を持っているのかを知ることです。自分をとりまく社会がどうなっているのか。なぜ、どのようにそのような社会になっているのか。あるいは、自分の生きている世界がどのような物理に支えられているのか。そういったことを知ることには、わかりやすく意味があります。

また自分が何をどのように考え、どのような空想をしているのかを知ること、あるいは自分の身体がどのようになっているのか

を知ること、つまり自分を構成する要素と、それらの要素がどう組み合わせられているのかを知ることが、自分を知ることです。

「環境」と「自分」は二つの層として捉えることができますが、さまざまな局面で接してもいます。何かを食べるとき、その食材はもしかしたら遠いどこか海外の産地で収穫されたもので、長い流通経路にのって届けられ、誰かの手で調理されたものかもしれません。そしてその産地での農業のあり方、流通網の仕組み、調理法それぞれにきつと歴史があります。そしてその食べ物を食べるとき、味覚が感じられ、栄養が摂取されます。そのときどきの体調によって、その経験は都度、異なったものとして経験されるでしょう。たったいま口にしたその食べ物について、文化的な背景を意識するかどうか(郷土料理やクリスマスケーキ、おせち、エスニック料理)、単に空腹を満たすだけで何も考えていないのか、何をいつどのように食べるのかという単純な行為だけでも、さまざまな要素の組み合わせになっています。

環境も自分も、それと意識しなければ分割されていない大きなひと塊の何かでしかありません。よく目を凝らすように意識を向けるからこそ、解像度があがり、それまでは意識されなかった細部がクローズアップされて、またさらに細かく深く理解する可能性がひらけていくこととなります。読書は、環境や自分についての解像度をあげるのに役立ちます。

環境や自分じしんを構成している諸要素と、それらの諸要素が互いに関係し合って構成されるネットワークは、それと意識されていない状態でも、つまりそれを知らない状態でも、存在してはいます。ひとが空を見上げるまでは意識されない星々のように、そこに存在しているのにもかかわらず、意識されないし知られてもいないのです。

【出典】永田希『再読だけが創造的な読書術である』(筑摩書房、二〇二三年) 一一二〜一一四ページ

